

■日 時：2019年1月27日（日）

■場 所：立川教会

■説教題：「レプトン銅貨2枚の献金。」

■聖 書：旧約 ハガイ書2：1－9（p1477）

新約 ルカによる福音書21：1－9（p151）

■讃美歌：127「み恵みあふれる」510「主よ、終わりまで」

お早うございます。

昨日から、強い寒気が関東地方を覆い、冷たい風も吹き付け、外を歩くと身体が芯から冷えて来ます。インフルエンザも警戒域を超え、猛威をふるっています。健康には十分気を付けて、この1週間を過ごしたいと思います。

ところで、今日与えられた聖書の御言葉は、私たちキリスト者にとって、信仰生活に止まらず、人生をも考えさせる御言葉です。特に、前半の女性の話しは、まさにその通りです。

この話しの舞台となっている神殿について少し触れます。紀元70年に跡形もなく破壊されるエルサレム神殿ですが、神殿の表玄関と回廊の柱は、高さ12mの、継ぎ目の無い白い大理石の円柱で出来ていました。ヨセフスと言う歴史家は、その著『ユダヤ戦記』で、この神殿について次のように記しています。

「外から見た神殿の正面は、人々の心を奪い、目を見張らせるに十分だった。それはすべて重厚な金の板で覆われていたからである。朝日が昇ると、それはまばゆく照り輝いて、見る者が思わず目をそらさずにはいられなかった。まるで直射日光を受けたような感じだった。他方、初めての人々が遠くから神殿を眺めると、それはちょうど雪をいただいた小山のように見えた。何故なら、この部分に関する限り、それは虚飾ではなくまさしく純白だった。」

この神殿には、「女性の庭」と呼ばれる庭がありました。そこには13の献金箱が置かれ、形は入り口が細く、下に広がって、ラッパの形をしていました。13の献金箱は、それぞれ使い道が決まっていて、例えば犠牲を焼く薪用の献金箱、祭壇で燃やす香料用の献金箱、あるいは金の器の維持費用の献金箱などでした。

そして、イエス様は座って、献金箱に人々が献金を入れるのを見ていました。

すると、そこに貧しい一人の女に先立たれた女性がやって来ました。彼女が捧げたのは、レプトン銅貨2枚でした。レプトンと言うのは「薄い物」という意味で、薄い硬貨、即ち当時のお金の最少単位でした。金額から言えば、本当に取るに足りないわずかなお金だったのです。しかし、イエス様は、その女性の献金に対し、最大の賛辞を送るのです。彼女はどんな裕福で多額の献金をした者より、はるかに多くの献金をした。何故なら、自分の

持てる全財産を捧げたからであると。

改めて説明するまでもなく、その意味は十分にお分かりだと思います。

額は大きくても、有り余る中から捧げた献金と、たとえ取るに足りない額であっても、その人の生活を賭けた献金、言葉を換えて言えば、その人の生活に影響を及ぼさずにはおかない献金との違いです。

私は、この貧しい女性が捧げたレプトン銅貨の話しを読む中で、レプトン銅貨を、神様から与えられたタラントンの、賜物と置き換えて読みたいと思いました。そして、それは、私たちが今歩んでいる人生とも深く関わって来ます。

生れてから今に至るまでの人生を振り返るのです。私の場合、幸いに運動能力の面で恵まれていたと思います。又、健康の面でも大きな病気はしたことが無く、入院生活も一度だけです。私が生まれたベビーブームと呼ばれた時代は、中学を卒業して就職をするクラスメートがいる中で、教育熱心な両親のもと、高校・大学と何一つ疑問も無く進みました。

これだけでも恵まれたタラントンだと思います。それに加え、幾つかの資格も取りました。

そして、問われるのです。それでは、これまで歩んで来た人生の中で、自分は、神様から与えられたこれらのタラントンの中で、どれだけを捧げて来たのかと。余裕ある生活の中からそのわずかしかならば捧げていないあの金持ちのようであったのか、それとも貧しくとも自分の生活を賭けて神様に奉仕したあの女性のようにであったのかどうかと言うことをです。

神様から与えられたタラントンを神様にお返しすること、この事と関連する聖書の箇所として私たちが思い起こすのは、あのタラントンの譬えです。主人から 10 タラントンを与えられた者が他に 10 タラントンを儲けて主人に褒められたこと、又 5 タラントンを与えられた者も他に 5 タラントンを儲けて主人に褒められます。しかし、1 タラントンを与えられた者は、それを失うことを恐れ、地中に埋めたままにして、主人の怒りを買うあの話です。タラントンとは、当時の労働者 1 年分の賃金に相当する額でした。

私は、神学生時代、この聖書の箇所を用いてメッセージを語る時が与えられました。その時、私は、タラントンとは自分の人生ではないかと考えたのです。この話しは、神様から与えられた人生をどのように生きるのかが問われていると思いました。

そして、今日のレプトン銅貨の話しもこの事と深く結び付くのです。

2 枚のレプトン銅貨が私たちに教えているのは、神様に奉仕する姿勢です。

献金に先立って問われているものがあることです。

それは、自分の生活との関わりの中で、どのような姿勢で献金を捧げているかと言うことです。有り余る物の中からの一部なのか、それとも生活は厳しくあっても精一杯の献金

なのかと言うことです。

そして、献金が神様への奉仕と言う時、その事と関連するのは、神様から自分に与えられたタラントンです。それは賜物とも言います。この賜物を、自分は人生の中でどのように神様にお返ししているのか、その事が問われています。

しかし、同時に、タラントン、賜物には、二つの面があります。

一つはこの世的な側面、言い換えれば、この世の価値観から見た賜物と、もう一つは神の国の側面、言い換えれば、私たちの思いを超えた神の国の価値、神様から見た賜物の価値です。そして、後者は、私たちは計り知る事は出来ないのです。

立川教会の働きを見た時、私は、生活は厳しくあっても、精一杯の献金を捧げることによって神様に仕えている人々と、一方、自分に与えられた賜物を精一杯に用いることによって神様に仕えている人々、そして、私たちの価値観では計り知ることの出来ない在り方で神様に仕えている人々、それらが見事なまでに神様に用いられていることを知らされています。本当に、見事なまでにです。私たちは、その働きのどれ一つをも欠くことが出来ないのです。

そして、願わくは、もし自分に足りないものがあれば、なおそれを祈り求めてやまず、教会の働きに与ることです。

この貧しい女性のレプトン銅貨 2 枚を捧げた話から、私たちは以上の事を教えられますのです。

続いて、聖書の後半部分、5 節以下に短く入ります。

神殿の崩壊と、世の終わり、終末に関わる預言です。

この神殿の崩壊や終末に関わる預言は、マタイやマルコにも記されています。事実、紀元前 20 年、ヘロデによって建設の工事が始まり、約 80 年もの歳月をかけて完成したエルサレム神殿は、第一次ユダヤ戦争の最中、紀元 70 年、ローマ軍によって破壊されつくします。あの壮大な神殿を覆っていたどんなに素晴らしい装飾品も、奉納物も、神殿を守ることとは出来ませんでした。それでは、この神殿崩壊は、私たちに何を教えているのかを考えます。それは、前半のレプトン銅貨 2 枚の話とも共通する、神様を礼拝する事の本質的な意味を問うているのです。

神様を礼拝するに必要な事の一つだけです。

2 人又は 3 人、心を合わせ、思いを一つにして、神様に向かって讃美し、祈り、聖書の御言葉を聴くことです。それ以外の物は全て二次的なものです。会堂も、集会室も、牧師館も、オルガンもピアノも、全て二次的なものです。

神様が求めておられる事、それは、霊と真実（まこと）とをもって神様を礼拝すること、

それだけであり、そして又、その霊と真実なる礼拝から押し出されて、世に遣わされて行くことです。

又、続く終末の預言から私たちは何を学ぶのでしょうか。

それは、希望です。

終末の時には、厳しい試練の時が訪れて来ることが語られていますが、私たちが心を留めるのは、終末とは、神様の支配がこの世に貫徹することを意味していることです。神様の義が世を支配することです。そして、神の国が到来するのです。

神の国とはどのような国かを私たちは知ることが出来ません。

しかし、私たちが、神を愛し、隣り人を愛する時、その“時”は、神の国を先取りする“時”となる事を知っています。

この立川教会の交わりの時が、神の国を先取りする時となり、からし種が成長して天を覆うように、その時をさらに広く厚く広げて行くことが出来ればと祈るのです。

祈りましょう。

